

書評論文

Theodora Dragostinova, *Between Two Motherlands: Nationality and Emigration among the Greeks of Bulgaria, 1900-1949*, NY: Cornell University Press, 2011

セオドラ・ドラゴステイノヴァ著 『母国の狭間で——一九〇〇年から一九四九年にブルガリアに生きたギリシア系住民の国籍と移住生活に関する考察——』

コーネル大学出版、二〇一二年

近江 啓太

民族分脈省察

本書の中で、セオドラ・ドラゴステイノヴァ博士は一九〇〇年から一九四九年の、一帝国から二国民国家への最終移行期間中に、国家や国民がどのように民族の自我同一性の問題に直面し、どのようにその問題に対処しなければならなかったかという、想像力溢れる非常に力強い議論を提示する。ブルガリア国家とギリシア系民族としての二律背反に陥っていた国民個人が、集団の結束という政治力学に基づいて、様々な困難な政治選択を余儀なくされ、行動していたと著者は語る。ブルガリアのギリシア系官僚や国家主義を掲げた市民活動家らは、少数民族に属していた一般市民を、

国籍の判断基準や不安定な国家に対する人々の忠誠心を絶えず再定義する事によって強制的に単一社会に組み込もうと目論んでいた。その為、ブルガリア在住の非力なギリシア系民族の一般市民達は、日々の圧政から逃れようと試行錯誤を続け、大多数のブルガリアのギリシア系住民は移住を躊躇し、国有化政策と強制退去に場当たりに対処しながら、国籍というものに当時は妥協せざるを得なかった国民の日常性を論述する。

著者の本書執筆の目的は唯一つ。二つの相反する母国の間で、ブルガリア在住のギリシア系住民が、国籍、民族同化、市民権を決めかねている状態から、何故無条件で受け入れる事を強制され

たのか、文書で正確に記録する事にある。オスマン帝国の黄金時代が弔鐘を告げ、ブルガリア人、ギリシア系住民の社会工学者達が、分裂したバルカン半島の統合と再構築を担っていた。この無条件同化を余儀なくされたブルガリア在住のギリシア系住民達は「時として、自ら意図して、帰属意識や帰属団体を変容させていた。その理由も、就職口を模索する為であったり、社会的統合を意図したものであったり、個人的な自己変革の為、又、究極的には自身の身体的生存の目的を達成させるものであった。その結果として、国家としての自我同一性は明文化された特定の文脈に適應するように暫定的な安定性を獲得していたのである」(Dragostinova 2011:14-15)。民族同化はブルガリアに住むギリシア系住民に唯一残されていた選択肢だった。又同時に、ブルガリアでは国民自我同一性に関して言えば、国民を駆り集める国力増強の一助を担った政治手段として用いられていた。

著者は、バルカンの西洋の歴史批判を逡巡しない。個人の人権は蔑ろにされ、人々は頑なに自身の民族性に固執していたというのが通説となっていて、所謂国際研究学者によってその見当違いな見解も流布している。それ故、地域の画一的な固定概念の形成・醸成に多大な影響を与えていると警鐘を鳴らす。著者はこう語る。「ヨーロッパの中でも外国的な特異な地域として、バルカ

ン主義に代表されるような非公開、内々の、不正の談話が罷り通っている」(Dragostinova 2011:4)。著者は、現在の通説を、有益な内容に乏しく、偏狭に満ち溢れた「固定概念——二〇世紀を通じてバルカン半島では常軌を逸した内輪揉めで互いに殺しあう敵対心と残忍な民族間闘争が未だ続いている——が引き継がれ、結果として、一九九〇年代のユーゴスラビア戦争中の、安易な紛争の説明理由として復活させられてもいる。」と(Dragostinova 2011:5)断じる。著者は学術研究が如何に恣意的で、ある特定の目的を持ったものであるかという事、又どのように国史や歴史情報が歴史検証の証拠として採用されているかという事を糾弾し、彼女の研究は非常に内省を促す歴史作品でもあり、学者自身が歴史的証拠を生み出しているという実態、その結果生み出された学術研究の成果が物的証拠となり、身体的に精神的に、史実に関わった人々に、彼らの民族の価値観そのものに、民族の自我同一性に多かれ少なかれ危害を及ぼす可能性がある現実を熟慮しなければならぬと読者に警告を發する。

このようにブルガリアの国史の正常化がこの書籍の中での著者の究極の目的となっている。この解釈学に由来する彼女の談話分析が、バルカン半島の国家主義や民族性といった少数政治の通説とは異なる全体像を提示している。ブルガリアに住むギリシア系

住民の一般市民の会話に焦点を当てた研究手法を用い、一般市民の反応——積極的に国家の談話形成・再形成に関与していた彼ら自身と、政治的実践が国籍や民族問題を表面化させていた事実——に対する鋭い観察眼で、著者は独立国家に関して本質的に異なる社会図式を赤裸々に綴る。複数の代理人の間に存在していた絶える事の無い相互作用、ブルガリア官僚とギリシア系住民一般市民の間での戦略的相互作用があったと、著者は論じる。国家談話を独占した、忠誠心に関して公言する権限が与えられていた、偽りのギリシア系住民、真のブルガリア人、国粹主義者（政治活動家）と様々な人格・性質を持った多くの民族が存在していた。そして、其々の市民を一国民として混成する一国家一民族という単一社会の創造をブルガリアは模索していたのである。ブルガリア在住のギリシア系住民達の国史の既存の認識は、バルカン半島の国家主義は非民主主義的で、排他的、外国人嫌悪の様相を帯びた国家主義という理解に留まっただけで、西洋の文明的な国家主義と東洋の民族の多様性の違いのみが強調されてきたのが学術界の現状である。それ故、権力者や政治選民や知識階級といった体制側によって維持されてきた史実の正常化を著者は試みている。

大抵の場合、選良階級の独占者によって国史が詳細に記録される為、一般国民の国の歩みは過去に埋葬されるのが現状である。

著者は、それ故、極々普通の国民の談話に着目した。ヨーロッパの少数民族が抱える政治難民を巡る問題、帝国から国民国家への移行期での中央集権化、地方分権化という政治枠組みの中で、著者は、過去の政治選良階級の職業上の愛国者と同様、国家修辞という戦略を用いて、一般国民の国史を綴っている。彼女のそのような国史の解釈分析は、一九〇〇年から一九四九年の間に沸き起こったブルガリアでのギリシア系住民の移民問題、少数民族の政治問題の全体像を、よりの確に、より正確に理解するのに、信頼度の高い、立場が明確に位置付けられた分析である。本書籍は、一般市民の間の記憶や母国の個人の選択が、彼ら自身の国民性、国籍、国家主義形成に、非常に重要な役割を果たしていた事を示している。

本書の優れた点は二点挙げる事が出来る。「緊急措置的自我同一性」という新しい理論的視座が第一点。そして二点目は、帝国の定めに翻弄され非力な一般市民の見解を配慮した既存の知見とは異なるより批判的でより自由で解放的な分析の見地である。

まず初めに、著者は「緊急措置的自我同一性」という斬新な理論の見解を提示する。緊急措置的自我同一性とは「個人が政府の公式見解・政策に適応する為を選択したという美辞麗句的戦略」を指す (Dragostinova 2011:14)。詰まり、生存が第一の行動動

機となっていて、それが自我同一性の変化の説明変数となっている。アレクシー・ヨーチェツク博士の提唱した概念「観念的識字能力」とマイケル・ハーズフェルド博士の国民国家の固定概念の研究を、バルカン半島の人々の事例に応用させ、人々は緊急を要した必要性和意図的に自身の属性と国民としての帰属性を自身の自我同一性の根幹として変化させながら行動し振舞っていたと著者は論じている。究極的には人間の行動は、国家主義に忠実に従っていた信条と完全に繋がっていた訳では無く、個々人の必要物資を満たし、精神的拠り所となり、忠誠心や復讐心といった特定の観念形態を実現する為の金銭や性や権力と複雑に絡み合っているのが現実であると説く。人間は、論理や費用対効果の合理計算や論理的思考、それらと相反する権力や富に対する飽く無き欲望といった感情や本能の狭間で、生きている事を示唆している。さらに、国家、国民とは、そのような自己利益を追求する私的個人の集合体であり、実体のない集合体の範疇を元にした個人の性格、行動予測、行動傾向は、自我同一性の分析に包含すべきではないと言及する。この緊急措置的的自我同一性理論は「人々はそのように故郷の選択をしているのかという仕組みを説明してくれる。個々人の母国の選択を巡る物語は、人間の条件であったり、其々個人、家族、共同体が、何時、どのように、政府が明確に宣言し

ていた国家・国民政策と向き合い、懸念を示していたのか、その難題を紐解いてくれる事例を提供してくれている」(Dragostinova 2011:16)。ギリシア系住民の行動動機に関していえば、それは読者諸君も想像される様に、至極簡単である。緊急措置的的自我同一性という概念が非常に有用な概念で、少数民族の個人の自我同一性や、集団としての自我同一性の政治的選択の二つを同時に説明している。

第二の本書の優れた点は、著者の解釈学的方法論が、彼女自身も含め、人間がどのように主体者自身の特別な世界の集団的意味形成をしているのかという問いに、異なる社会の全体像を提示するのに非常に成功を収めている点が挙げられる。ここに彼女の最大の学術的に非常に価値の高い貢献があり、重要な意義を持つ。即ち、ブルガリアのギリシア系住民の国民性の表現や意思伝達を目的とした民族自我同一性の同化の仕組みに関する個人主体者の意味形成の両義性や意味的可塑性を強調した彼女の解釈分析研究は、歴史的に文化的に明確に理解された設定環境を、必然的に歴史的な脈を踏まえて論じられていて、彼女の研究内部にしっかりと組み込まれ、研究調査方法論の進展に寄与もしている。ブルガリア人学者としての彼女の研究者としての文化的民族的素養、構成主義派に属する歴史学者としての学術的立ち位置が、一九〇

○年から一九四九年に起こったブルガリア在住のギリシア系住民の、移民・少数民族の政治問題の見解の、巨視的・微視的視点の力学の相違、見解の相違を理路整然と記述する事に非常に役に立っている。これらがブルガリア在住のギリシア系住民の流動的な記憶であったり、意識というものを例証する際にしっかりと研究に反映させられている。

仮説検証型の実証主義研究とは異なり、一般化というよりは、歴史的・文化的文脈の整合性を取りながら、研究に取り組む姿勢が明確に示されていて、研究成果としても一定の学問的価値も示り達成されている。著者が多種多様な情報源を証拠として提示している事で、ブルガリア在住のギリシア系住民の国籍に関する互文性がしっかりと描写されている。この方法的見地に関して、著者はこう警告を発している。「基礎的な歴史的談話信憑性を採用する代わりに、研究者は固定化した現実として歴史の幻影を作り上げた過去に基づいて現実を投影しなければならない自身自身研究者としての限界であったり、偏向であったり先入見を明らかにする必要がある」(Dragostinova 2011:10)。そして、こうも続ける。「過去に起きた他国への国民の引き渡しは征服者と被征服者の間に永遠に存在し続ける紛争の産物としてのみ理解可能なのだ」(Dragostinova 2011:10)と主張し、読者は「当時

の現実社会の日常の国家主義とは、国家が規定した国策に驚くべき程国民個人は無関心であったり、あからさまに政権転覆を意図していたり、沈黙という適応を間違いないで示していた」(Dragostinova 2011:13)と、多様な見解が示されるべきだと、ピエール・ボルドールを引用して語る。

次に、本書の優れた点と合わせて、難点も二つの観点から論じる。博士が見落とした点が二つある。これは、研究調査手法・分析方法の点で、透明性と反芻性が脆弱な事が挙げられる。

まず初めに、第一点目の研究の透明性が十分には達成されなかった事について話を進める。この点は、文脈性とも関わる事柄である。私が何故これに注意したかというと、現地調査が行われた様な場合に、調査手法の可視化・透明化が本書に明記されていないのはおかしいと考えたからである。定量研究に代表される様な実証主義の研究とは対照的に、解釈学的研究の学術貢献度を示す代替的な基準ともなる文脈性の全体的な有用性に関して、自由度・解放度が高い事は自明の理であり、その新たな指標は、知識自体が歴史的文化的文脈に沿ったものであるかどうかを見極める批判的な視座を確保するという役目を果たした事も確かである。著者は研究対象と適切な距離を保っていたのだろうか、問われる読者もいるかと思われる。そして、この事自体が問題となり得

る事も有り得るのではあるが、この研究に限って言えばこの類に該当しない。寧ろ、問われているのは、この研究自体の文脈性は「重厚な描写」を必要としていたのであり、細かな研究記録であったり、深く考え抜かれた上で綿密に練られた研究計画、注意深い観察眼、詳細に渡る対談の覚書等、その他諸々に議論が尽くされていただろうか。この重厚な描写が、学者の研究の透明性を増す事に寄与する事は言うまでも無い。研究者は可能な限り、証拠と示す材料の収集方法や、定型化した知識がどのように生み出されてきたのか、又、潜在する研究に関わる倫理的問題や研究自体の危険性に関して研究者の作成した基礎資料が今後与える影響の大きさや、主張そのもの自体に、研究の透明性や可視化に取り組む事が求められている。著者は、依拠する具体例や、彼女の学者としての語り手・研究者としての社会的役割が、会談対象者との質疑応答や彼女が関わる研究環境自体、最終的には調査の結果到達した結論に与えるこれらの影響の可能性を、書籍の中で必要最低限で言及している。三角測位、詰まり、多種多様な情報源・物的証拠を元に行う研究手法は、必然的に実行されているが、これだけでは十分とは言えない。例を挙げるならば、彼女の取材対象には具体的には誰が選ばれたのであろうか。又、別の懸念材料の例として、彼女はどのようなにして研究取材する人々に接触を取っ

たのであろうか。雪達磨式方式で取材の相手を探し当てたのであろうか。其れとも現地調査以前の計画段階である一定の人々を特定していたのだろうか。これらの研究調査の一部を担っている側面が、詳細に渡って明記されるべきであって、方法論の部分で丁寧論じられるべきであった。

第二に、著者の国民国家形成の学問の取り組み方に幾分反芻性が欠けている。ペリグリン・シユワシエ教授、デヴォラ・ヤノウ教授によれば「反芻性とは研究者の積極的な熟考であったり、研究対象との建設的な関与であり、研究調査の中で、研究者自身の研究概念の意味形成が生じ、特定の研究環境状況が及ぼす影響であり、様々な研究段階で起こる出来事であり、最終的には論文として書籍という文章を通じて行う研究の主義主張にも関わってくるといふ事実である」(Schwartz-Shea & Yanow 2012:100)とある。この反芻性が、本書では改善されるべきだったと私は指摘したい。著者自身の主義主張との関係性を見極める自己監視がより、本書籍の中で透明性を持って明快に述べられるべきであった。又、そうする事で、彼女自身の唯一無二の研究の信用性をもっと高められた筈である。彼女の肉体的・身体的存在無しに、研究環境との深い関わり無しに、そして際立つ彼女の学者としての立場、又は仮面無しには、この研究自体も不可能だった筈である。

この事自体が、重厚により明快に記述されていた方が良かった筈で、最低でもこの重厚な描写が研究付録として提供されるべきであった。現地調査はいつ実施されたのか。どれ位の期間を要したのか。参与観察が行われたのか。何人の研究取材を敢行したのか。追跡調査は行われたのか。社会調査を実施したのか。どういった目的で、どういった経緯で、国家主義をバルカン半島の一般国民目線で研究調査する場所が選択されたのか。こういった問いは、明快に書籍で述べられる必要があった。疑い得る丈け疑い、その疑いの一つ一つを出来るだけ綿密に描写する、探索する、そんな研究姿勢が示されるべきだった。

方法論において透明性・可視化が幾分担保されていないのが本書ではあるが、本書は読者を国籍や移民・移住、国家主義、自我同一性に関する問題を、より広義の意味で知識・知恵を改善させる位置付けに一役買っている。有史以来、永続した帝国は一つとして存在しない。オスマン帝国としてこの例外では無かった。帝国崩壊と国民国家統合の渦中で、少数民族であったブルガリアのギリシア系住民は、苦渋の決断を余儀なくされ、辛酸を舐めさせられ、敗北を味わい、相反する自我同一性を余儀なくされた。二つの母国の狭間で苦しんだのが彼らであった。ドラゴステイノヴァ博士の綴る物語は、異なる地域の過去の他の帝国の移民・少数民族

族を巡る政治問題に当てはまる部分、応用可能な部分が多いのかもしれない。アメリカ帝国が斜陽期に突入し衰退を続ける昨今、どのようにアメリカが移民問題を扱ったら良いのか、民族の帰属意識、国家としての求心力に関して、この書籍がある種の政策提案を示している。又、政治選良階級と一般国民との間に存在する政治の再考のきっかけとなる一冊ともなっている。移民制限、移民排斥、外国人労働者、波紋を呼ぶ民族問題に新たな視座を提示するこの本書は、日本・日本人に何を訴えるだろうか。一般読者、研究者其々がこの書籍の有用性を日本の文脈性において自ら見出す事を切に願う。

参考文献

- 江戸川乱歩（二〇一六）『一枚の切符』青空文庫。
 大月康弘（一九九六）「イスタンブールのギリシア人——ギリシア・トルコ関係の中の少数集団——」『一橋論叢』116（4）、pp. 689-707。
 高木智章（二〇一六）「メディア・ナショナリズムに関する考察——そのアンビバレンス、限界と可能性について——」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』66, pp. 107-121。
 田村哲樹（二〇一五）「民主的家族の探求——方法論的ナショナリズムのもう一つの超え方——」『名古屋大学法政論集』262, pp. 15-37。

水原俊博 (二〇一六) 「多文化主義の規定要因の実証分析——松本市日本国籍住民調査(二〇一四)のデータ分析を中心に——」『地域プランド研究』11, pp. 15-26.

村田(澤柳) 奈々 (二〇一七) 「バルカンの国民国家形成とギリシア人コミュニティの再編: テッサリアにおける難民定住と土地分配をめぐるギリシア議会の取り組み(一九〇六〜一九〇七年)」『日本中東学会年報』26(2), pp. 151-184.

Schwartz-Shea, Peregrine and Yanow, Dvora. (2012). *Interpretive research design: concepts and processes*, New York: Routledge.